
マビノギ『南の草原の激闘』

アイオロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マビノギ『南の草原の激闘』

【Zコード】

N7970A

【作者名】

アイオロス

【あらすじ】

これは、Hリンのある冒険者の話であり、その人物にスポットを当てたものである。

(前書き)

これは無料ネットゲーム『マビノギ』で、自分のキャラを題材にした小説です。

知らない人はどう言うものか知らないかもせんが、わかる人にはありえないだろという感じでしうが楽しんでください。

「激闘の南の草原」

ウルラ大陸の北東部に位置する山々に囲まれた山村……。そこはティルコネイルと呼ばれている。

この世界、エリンの中で田舎の風景を残している村であり、村長のダンカンを中心に自給自足の生活を過ごす人々が多い。ソウルスクリームで導かれた魂が、最初に来る村であり、この世界での冒険者の始まりの地である。

しかし、昔に比べたら人々はにぎわってないの現状で、人々はさらなる活動場所を求めて物資が盛んな都会のほうへと流れていることは自然なことである。

それでも、この自然が溢れるティルコネイルにとどまる人は少數ながらいるのである。

日は落ちて、空にはエリンの紅き月、『イウェカ』が浮かびそれを装飾するかのように満点の星空が輝いている。

瞬く星の輝き。見るものを魅了する人々が生きる限り見続けている夜空である。

雲は一片も無く、この夜空を遮るものは何もない。

その夜空の下、ティルコネイルの南の草原。

ここは、凶暴な狼の類が出没しており、村民を困らせてている。ダンバートンへの道はここ南の草原の道しかあらず、頼みのエリン各地に設置されている『イウェカ』が昇りマナが漂うことにより起動するムーンゲートもダンバートンへつながる日も着てない時はしたがなくこの道を使用することが多い。

だが、その度に凶暴な狼に襲われて人々の傷害を与えているのである。

ほかにも羊などの家畜に被害を与えることが

これでは余りにも、村に損害を与えると考へた村民たちは、冒険者たちに狼の退治を依頼して、その見返りに報酬を渡すことを始めた。それにより以前のような狼に襲われるということが減ったのだが、未だ狼は出没し続けているのである。

そんな深夜の南の草原に麗也は狼を狩り続けていた。

「ふんっ！」

気合の一聲ともに、右手に握った白銀の刀身をグラディウスを月明かりの反射と共に一閃。

襲い掛かってきた灰色狼の胴体を真っ二つに斬り裂いた。

麗也は顔や衣服に返り血がつくが、それに構わすことなく、即座に別の狼に狙いをつけて剣を体全身を使って振り出して、首をはねる。

夜空に首が飛び、草むらの上に鈍い音を立てて落下した。

麗也は剣を鞘に収めて、斬殺したいくつもの狼の死体を拾い上げて、アルゴテ川の岸に持ち運んで鞄の中から解体用の包丁を取り出して狼の死体を綺麗に解体して川で洗っていく。狼の肉はこの世界では食料となるために、冒険者の多くは解体した肉を食料として携帯している場合が多い。だが、腹持ちの良い分、短所として食べ過ぎると太るという点があるので、程ほどに食べていることが多い。

「これだけあれば良いな」

解体を済まして、食べれる肉を鞄の中にしまい、いらぬ部分を小さい袋の中にいれて別にする。あとでキャンプファイヤで焼却する。それがマナーというものだ。

麗也は川の水で、顔についた血を洗い落とす。生きるために狼を殺傷しているが、それもこちらが生きるために、この村の住民のためであるのだから仕がないことだ。

生きるために割り切りも必要である。

「さて、ここから狩りは切り上げるか……」

麗也は川岸から立ち去ろうとしたが、ティルコネイルの聖堂に仕えているエンデリオン司祭の言葉を思い出した。

『今日の深夜に南の草原の方で巨大白狼が出るそうですよ。時間的に、『イウェカ』が頂点に昇りついている……。時間的に午前十二時と言つたところだろうか。

出現しても良いような時間帯である。

「来るかもしれないな……」

麗也がそう呟いた瞬間だつた。

山の方からティルコネイル全体を貫くような大きな狼の雄叫びが響いた……。

その雄叫びを聞いたティルコネイル冒険者たちは騒ぎ出した。それと同時に麗也は、即座に行動を起こす。

背負つている愛用の長剣『クレイモア』を鞘から引き抜き、南の草原を駆ける。

巨大狼が山から降りてくる場所で迎撃するのである。

過去に数度見たことはあるが、巨大白狼はかなりの強さを持っていることは百の承知だつた。

だからこそ、それを倒せば名誉といつものも与えられるということである。

駆ける麗也は山から駆け降りてくる白狼の群れを視線に捕らえた。

南の草原には灰色狼の他にも少数民族ながらも白狼は出現している。群れを作らず、個別に行動していることが多いが、視界に写っているのは、明らかに數十匹ほどで群れを作つている。これは、巨大白狼をボスとして、その下にいる家来ような存在であり、ボスより先に山を降りてきたのだろう。

白狼は、灰色より凶暴な種類に属しており冒険者を始めたばかりの者が灰色狼と同じとたがをくくつて手を出せば、相当な痛手を負う。

麗也もエリンに来たばかりの頃は白狼を、灰色狼ですら倒せな

かつた。

しかも、他人よりも戦闘技術の成長する速さが遅れ、他の冒険者たちよりも劣っていた。

しかし、地道な努力は忘れなかつた。それが長期に渡つて蓄積されたのと他の冒険者の助言などを糧にして、今は狼どころか熊やその凶暴な生物達と戦える力と術を手に入れた。

それは、完璧とはいえないが昔に比べて相当な実力をつけた。白狼を恐れることは何もない。

麗也は足を止める。そして、両手で握らないと振ることができない『クレイモア』を構えて視界に捉えた駆ける白狼の群れを迎え撃つ。

迎え撃つ麗也に気づいた白狼の群れの先頭の一匹が山から駆け下りてきた勢いを利用して、麗也に向かつて鋭い牙を生やした大きな口を開いて飛び上がる。

麗也は、それに対して『クレイモア』を一息で腰を深く落として袈裟懸けに振り込む。

光に刀身が一瞬白銀に輝きながら、飛び上がつた白狼を一刀で肉体を斬り裂く。その瞬間に白狼の動きを空中で止まりそのまま草の上に落ちて鮮血が飛び散る。

麗也は白狼を斬り捨てたと同時に、別な白狼に向かつて『クレイモア』を横殴りに大きく一閃。

身構えもしてなかつた白狼をの胴体を鋭い刃が切断する。

「一匹……」

そう咳きながら、麗也は周囲を一瞬だけ確認した。

群れの白狼の動きとめて、麗也を睨み付けている。

「できれば、巨大白狼と戦うのに体力を温存しておきたいがそう簡単には行きそうもないな」

麗也は『クレイモア』を両手で握つて、白狼の群れに向かつて地面を蹴つた。

群れの一匹に上段から斬撃を放つて、肉魄する。

それに反応した白狼の数匹が行動を起こした。数匹同時に襲い掛かってきた。

「ちいっ！」

麗也は舌打ちと同時に『クレイモア』を両腕の力を全て使って白狼に向かつて斬りかかる。

『クレイモア』は威力は絶大だ……。だが、その反面にスタミナを大きく消費しやすいのである。麗也は体力に自信があるほうであるが、さすがに長期戦は厳しいものがある。

襲い掛かる白狼の群れを『クレイモア』で斬り裂いて行くが、さすがに息があがってきた……。

だが、先ほどよりは頭数が減り、他の冒険者がこの南の草原に集まりだしたことにより白狼の群れが麗也一人に狙いを定めることがなくなった。

これを利用して、麗也は自分が着ているサンドラスナイパースーツの数多いポケットの中からスタミナ・ポーションを取り出して、蓋を開けて一気に飲み干す。

白狼で疲労した体が少しばかり楽になつたのが実感できる。あまりポーションは多用しないほうがこういった場合には便利なものである。

安心していたのはつかの間だつた……。

空気が変わつた……。それと同時に麗也の周辺が暗くなつた……。『イウェカ』が雲に隠れたのだろうと思ったが、自分の周囲以外は明るさが変わつていなかつた。その理由を確かめるべく空を見上げた。

空を見上げた瞬間に暗くなつた理由を理解した。

『イウェカ』を隠れさせたもの……それは空中を飛ぶ巨大な狼であつた。

それは普通の白狼に実に数倍以上の体格有している。

その巨大白狼の体毛が月光の逆光線により美しく輝いていた。

その姿に麗也は一瞬だけ目を奪われていた……。

そして、凄まじい音を立てて着地した。その反動が地面から体にジンジンと伝わった。

そして、白狼が麗也の方に向きを変え、その大きな目を睨みつけてくる。

麗也はそれに対して、体が熱くなつた。体中のアドレナリンが放出されているのが実感できるような感じだつた。

あふれ出でくる汗が自分がつ緊張していることを嫌に感じさせていた。

両手で持つた『クレイモア』の長い柄を大きく強く握る。

「私は運が良いと言つべきかな……」

麗也はナルシスト的な物言いで口を綻ばせて、巨大白狼に向かって走り出す。

一瞬で巨大白狼の右の脇腹に飛び込んだと同時に、『クレイモア』を構えから、斬撃に移行する。

腰と両腕の全体をフルに使って、足全体を強く踏ん張つて、がら空きのわき腹に向かつて渾身の斬撃を放つ。

『クレイモア』の鋭利な刃が空気の抵抗を切り裂いて反応が遅れた巨大白狼の肉体と激突する。

重い感覚が両手首を通して体中に伝わる。

巨大白狼が斬撃により悲鳴をあげた。

その斬撃は巨大白狼の重厚な肉体とその重い物量に前には斬り裂くといつところまではいかなかつた。

だが、わき腹に出血をせる大きな傷を負わしたことは、初太刀の意味は成した。

麗也は即座に防御の取りながら後ろに下がる。

だが、麗也が取つた防御姿勢の隙間通るように腹部に向かつて白い何かが矢の『ごとく伸びてきた。

「があ……」

それは腹部を鋭い刃のようなもので着ていた服ごと大きく斬りつけた。

麗也はその斬りつけられた激痛に耐えて、後ろに跳躍した。

切り裂かれた服の下、腹部の傷から自分の血が出ていた。

内臓までは届いていないがかなり出血と痛みがある。しかし、治療している場合ではない。

巨大白狼が喉を鳴らしてこちらを睨み付けてくる。麗也が放つた一撃により相当頭に来ていることが目に見えてわかる。

そして、白巨大狼の右の前足が赤くなっていることに麗也は気づいた……。

どうやら自分の腹部を斬りつけられたのはあの前足の鋭い爪だったようだ……。

巨大な体躯にあの俊敏さにあの鋭い爪……。

「そう簡単に仕留めさせてくれなさそうだな」

麗也は即座に柄を握り構えをとった。

腹部の出血により、徐々に体の動きが鈍くなってきていた……。早めに決着を着けなければ、こちらが殺れる。

麗也は前に踏み込む。

『クレイモア』を大上段に振り上げて、両腕の力のすべてを使い、巨大白狼を脳天を目掛けて大きく振り落とす。

全身の力と気迫を込めて放つたのは脳天割り。東洋では兜を被つた人間を、兜ごと頭部を真つ一つしたということがエリンに伝えられている。

しかし、脳天割りの標的である巨大白狼が消えた。

目標がなくなつた斬撃は、そのまま地面を大きく切り裂くだけであった。

「なつ……！？」

その声をあげたの瞬間に、攻撃をかわした巨大白狼が麗也に襲い掛かった……。

完全に脳天割りに全てを集中していた麗也は、防御の体制もとることなく巨大白狼の体当たりをまともに受けてしまう。

巨大な体躯から放たれた体当たりの威力は麗也の体をいとも簡

単に宙に飛ばした……。

麗也は体当たりの威力により、思考が停止した……。

だが、宙に浮いた体が草原の大地に叩きつけられたことにより、体全身に走った激痛とともに思考が蘇った。

体当たりを受けたダメージと叩きつけられたダメージが麗也の体に激痛を走らせた……。

先ほどの突進の威力と叩きつけられたことにより、内臓が激しく揺さぶられ、口から吐瀉物をぶちまける……。

「はあ……はあ……」

乱れる呼吸を整えようとするがそう簡単に戻らない……。

体全身が異常なほどに激痛が走っている……。

全身の骨格が一つや二以上折れててもおかしくない……。

「おい……前を見る……」

誰かの叫び声を聞こえた。

麗也はその声の通りに前を向く。

そこには、巨大白狼が大きく裂けた鋭い牙を生やした口を広げ、飛び掛つてきていた。

一瞬で判断した……殺される。

麗也は最悪な結果を回避するために重い『クレイモア』を手放して反射的に体を後ろに引かせ、同時に左腕を狼の口に向かって突き出す。

それと同時に狼の巨大な口が閉じる……。

「があああ……！」

麗也は悲鳴あげた。

咄嗟に突き出した左腕が巨大な口に噛み砕かれたからだ……。

筋肉や骨が、鋭い牙に突き抜かれて想像絶するほどの痛みを起

こさせた。

左腕の感覚がなくなっていく……。このままでは、左腕は引きちぎられる……。

だが、麗也は笑つた。

ピンチにして最大のチャンスが到来したからだ。

激痛を堪えながらも、右手を腰にさげた『グラディウス』の柄に手をかける。

「私の勝ちだ……」

麗也は、その一声と共に『グラディウス』を抜刀する。

鞘から抜き放たれた銀色の刀身が、弧を描いて巨大白狼の脆い喉元を深く斬り裂く。

斬り裂いた喉元から噴水のごとく出血。

その大量の真紅の血は麗也に飛び散り愛用のサンドラスナイパーを汚されていく。

左腕を噛んでいた大きな口が力なく開く。

麗也は肩の力で左腕を口から引き出す……。腕は自然とだらりと垂れ下がる。

しうがないことだ。骨や肉が噛み碎かれ、力が入らないのである。

巨大白狼が地響きを発して倒れこむ。喉元を深く斬り裂かれて即死である。鮮血が草原の地面の流れ出で、緑色の草を血の色に染め上げていく。

麗也は、『グラディウス』を鞘に納めた。

「苦勝だな……、これでは……」

乱れる息で麗也は乱れる息でそう呟いた。

群れのボスが倒されたことにより、その下の白狼たちは山のほうに逃げ帰っていく……。

戦いを終えた草原に平穏が訪れる……。

巨大白狼を倒した麗也に、周囲から祝福の声が送られる。

しかし、麗也にはその声がだんだんと小さくなつていった。

お礼の言葉を言いたいが声が出ない。

それに視界が霞んでいく……。

戦いが終わったことにより集中力が途切れたことと、戦闘によつて負傷して出血したことによる体中の血が少なくなつたのである。

麗也は力なくその場に倒れこむ。

周囲がそれによつて騒がしくなつたことを、麗也は薄れしていく意識の中で感じた。

麗也が目がさめるのはこれより三日後のテイルコネイルのヒーラー、ディリスの家のベッドの上であり、その枕もとには大量の報酬が置かれていたという。

麗也の旅はまだ続く。このHリンには何があるかわからないのだから。

(後書き)

どうでしたでしょうか?
マビノギの風景はあんな殺伐とはしてません。もっとゆったりとしたほのぼのしたイメージですが全然違います。
たほのぼのしたイメージですが全然違います。けしてゲームのイメージを勘違いしないでくださいね^ ^ ;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7970a/>

マビノギ『南の草原の激闘』

2010年10月9日21時42分発行